

# サルヴェパリー・ラーダークリシュナン 『インド哲学』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 泰司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18424">http://hdl.handle.net/10291/18424</a>

# サルヴェパリー・ラーダークリシュナン 『インド哲学』

山口 泰 司 訳

## 訳者序文

以下に紹介するのは、現代の生んだインド思想の世界的碩学、ラーダークリシュナン教授の文字通りの主著『インド哲学』の翻訳である。インド思想研究の基本的文献として、つとに名著の誉れ高い本書では、古代から近代初頭までのインド思想史の複雑な流れが、1,400ページもの紙幅を費やして、詳細かつ明快に叙述されている。その構成は、『第一巻「第一部 ヴェーダの時代」, 「第二部 叙事詩の時代」』, 『第二巻「第三部 六派哲学の時代」』の、全二巻・全三部よりなるが、その全貌を理解していただくために、以下に、その全章の表題を掲げておくことにしたい。

上巻 第一章「序論」, 第一部「ヴェーダの時代」: 第二章「リグ・ヴェーダの讃歌」, 第三章「ウパニシャッドへの移行」, 第四章「ウパニシャッドの哲学」, 第二部「叙事詩の時代」: 第五章「唯物論」, 第六章「ジャイナ教の多元的实在論」, 第七章「初期仏教の倫理的アイディアリズム」, 第八章「叙事詩の哲学」, 第九章「バガヴァッド・ギーターの有神論」, 第十章「宗教としての仏教」, 第十一章「仏教の学派」, 付論「若干の問題をめぐる更なる考察」。

下巻 第三部「六派哲学の時代」: 第一章「序文」, 第二章「ニヤーヤの論理的实在論」, 第三章「ヴァイシェーシカの原子論的多元論」, 第四章「サー

ンキヤの体系」, 第五章「パタンジャーリのヨーガのシステム」, 第六章「プールヴァ・ミーマーンサー」, 第七章「ヴェーダーンタ・スートラ」, 第八章「シャンカラのアドヴァイタ・ヴェーダーンタ」, 第九章「ラーマヌジャの有神論」, 第十章「シヴァ派, シャクタ派, 後期ヴィシュヌ派の有神論」, 第十一章「結語」, 以上である。

幸い, 本書の抄訳は、『インド仏教思想史』として, 三枝充恵・羽矢辰夫両氏の訳で, 大蔵出版より出版されている。これは, 本書の, 上巻第一章「序論」, 第七章「初期仏教の倫理的アイディアリズム」, 第十章「宗教としての仏教」, 第十一章「仏教の学派」の全四章を選んで訳出し, これをもって『インド仏教思想史』としたものである。

ところで, 我が国のインド思想研究は, 奈良時代以来の, 仏教を中心とした我が国の長い伝統から, 一貫して仏教研究が主流を占めて, 今日に至っている。しかしながら, インド思想の本流は, 仏教を生み, 仏教と並んで今日まで滔々たる流れを形成してきた「ヒンドゥ思想」にあって, これが, インドの文化的・民族的アイデンティティの実質的基盤になっていることは, よく知られている。だがその割に, 我が国では, このインド思想の保守本流ともいうべき流れに対する関心は, 仏教への関心に比べて, 格段と薄かったことは, 自然なこととはいえ, やはり残念なことだと言わなければならない。

しかし, とりわけ近年, インドの急速な発展に伴って, 我が国でも, インド文化一般への関心が急速に高まったことで, その背景・基盤をなすインド思想一般への関心も, 潜在的には, 急速な高まりを見せているようである。インド文化の中心をなす, ヨーガ, アーユルヴェーダなどへの近年の関心は, 健康への世界的指向を反映するものではあるが, 健康への関心が, 自然的生き方への関心を生み, 自然的生き方への関心が, さらに深い, 宇宙的自然を基盤とした, 宇宙的生き方への関心となって, それが, 現代世界の思想的・文化的閉即状態の突破口にならないとも限らない。実にヴェーダ・ウパニシャッドに発するインド思想は, その歴史の頭初から, 人間のうちに秘め

られた聖なる自然の実態に即した生活の喜びを語って、「靈的自然に帰れ」と説き続けているのである。

そこで、私は、本書『インド哲学』の中から、インド思想の保守本流をなす「ヒンドゥ思想」の流れをたどるべく、上巻第一部からは、第二章「リグ・ヴェーダの讃歌」、第三章「ウパニシャッドへの移行」、第四章「ウパニシャッドの哲学」を、上巻第二部からは、第八章「叙事詩の哲学」、第九章「バガヴァッド・ギーターの有神論」を、そして、下巻第三部からは、第五章「パタンジャリーのヨーガのシステム」、第七章「ヴェーダーンタ・スートラ」、第八章「シャンカラのアドヴァイタ・ヴェーダーンタ」、第九章「ラーマヌジャの有神論」、第十章「シヴァ派、シャクタ派、後期ヴィシュヌ派の有神論」を選んで訳出し、これをもって『ヒンドゥ思想史——インド保守本流の哲学』としたいと考える。

著者ラーダークリシュナン教授の紹介は、「明治大学教養論集」通巻498号「サルヴェパリー・ラーダークリシュナン『靈的理想主義の人生観』第一章」の「解題」に略述しておいたので、とりあえずは、そちらを御参照いただきたい。なお、各章の原註は、第一巻、第二巻を訳了した時点で、二度に分けて、まとめて掲載することにする。予定の全章を訳出した後、やや詳しい解説を施して、より包括的な立場から、本書訳出の意義を、明らかにしたい。

# 『インド哲学』

サルヴェパリー・ラーダークリシュナン

## 第一部

### ヴェーダ期

## 第Ⅱ章

### リグ・ヴェーダの讃歌

#### I

#### ヴェーダ

ヴェーダは、私たちが所有する、人間精神の最も早い時期の文書である。ウィルソン Wilson は、次のように記している。「リグ・ヴェーダとヤジュール・ヴェーダの校訂本が完成された暁には、そこから引き出される諸々の帰結についてはもとより、当時のヒンドゥ人たちの政治的ならびに宗教的な実情についても——これは、社会組織について知られている目下最古の記録の年代と同時代のもので、より厳密に言えば、ギリシャ文明の曙より遙かに先立ち、アッシリア帝国の最古の遺跡群にも先行し、おそらくは、ヘブライ人の最古の文献とは同時代で、ただその名前以外にはまだほとんど何も知られていないエジプト王朝にだけは遅れをとるといった時代のものであるが——

正しく評価するに足りる資料を、私たちは手にすることになる。ヴェーダは、古代人の深い思索が秘める最も興味深い事柄の全てについて、豊かな情報を与えてくれる<sup>1)</sup>。ヴェーダには、リグ・ヴェーダ、ヤジュール・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダの、四つがある。はじめの三つは、その名称、形式、言語においてばかりか、その内容の点でも、一致している。これら四つのうち、中心となるのはリグ・ヴェーダである。アーリヤ人が、自分たちの最も貴重な財産として、これまでの故郷の地からインドまで携えてきた靈感に満ちた諸々の歌は、アーリヤ人が新しい国で他の神々を崇拜する多くの人たちに会って、大切なものとして取っておこうという気持ちに駆られて集成したものだ、一般には思われている。リグ・ヴェーダが、その集成である。サーマ・ヴェーダは、純粹に、儀礼の集成である。そのうち多くは、リグ・ヴェーダのうちにも見られ、それ自身に固有な讃歌でさえ、独自の教訓を明確に体しているわけではない。それらはすべて、供犠に際して詠われるために集められたものである。ヤジュール・ヴェーダも、サーマ・ヴェーダ同様、儀礼のためのものであるが、特に祭式の要求に応えたものである。ホイットニー Whitney は、次のように記している。「初期ヴェーダ期では、供犠はまだ、主として自由な献身行為であって、一団の特権的僧侶の手に委ねられたものでも、こまごました規定のあるものでもなく、それをささげる者の自由な衝動に任されたものであったが、施主の手が心の思いに従った捧げものを神格に供えている時に、その口が沈黙していないよう、リグ・ヴェーダとサーマ・ヴェーダの讃歌と詠唱を伴っていた。……けれども、時が経つにつれて、儀礼は、次第に形式的性格を帯びるようになって、ついには、厳密かつ詳細な規定が施された一連の纏まった行為となり、祭式中に唱われる詩句が固定されたばかりか、一群の発声および定式化された言葉も、同様な形で、確定された。そして、これらの詩句や発声や言葉は、儀礼の営み全体の個々の行為に伴って、何らかの象徴的な意義を説明したり、交わしたり、寿いだり、賦与したり等々のことを、意図していた。……こうした供

儀の定式たちは、犠牲を意味する語根, Yaj から, Yajus という名称を受け取った。……ヤジュール・ヴェーダは、供儀を執り行う際に用いられる順序通りに整えられた、一部は散文、一部は韻文の、上記定式たちからなっている<sup>2)</sup>。サーマ・ヴェーダの集成とヤジュール・ヴェーダの集成は、リグ・ヴェーダの集成の時期と、儀礼的宗教の体裁が十分に整った（ヴェーダ本文に対する説明と注釈の書である）ブラーフmana期との中間期に、位置していたに違いない。アタルヴァ・ヴェーダは、私たちの目的からしたら、リグ・ヴェーダ同様、独立した内容の歴史的集成であるところから、リグ・ヴェーダに次いで重要なものであるが、長いこと、ヴェーダとしての威信を欠いたままであった。このヴェーダには、後期の思考の産物である、ある別なスピリットが浸透しているからだ。それは、ヴェーダ期のアーリヤ人が、この国のゆっくりと征服されつつあった先住諸民族が崇拜していた新しい神々や悪鬼などを考慮して採用した、妥協的スピリットを示しているのである。

どのヴェーダも、マントラ Mantras, ブラーフmana Brāhmaṇas, ウパニシャッド Upaniṣads という三つの部分から構成されている。マントラもしくは讃歌の集成は、サムヒター Samhitā とよばれる。ブラーフmanaは、戒律と宗教的義務を含んでいる。ウパニシャッドおよびアーラニヤカ Āraṇyakas は、ブラーフmanaの結論部分で、哲学的問題を論じている。ウパニシャッドは、この国のその後の思考全体の、知的背景となるものを含んでいる。初期ウパニシャッドのうち、アイタレーヤ・ウパニシャッドとカウシータキ・ウパニシャッドは、リグ・ヴェーダに属し、ケーナ・ウパニシャッドとチャンドーギヤ・ウパニシャッドは、サーマ・ヴェーダに属し、イーシャ・ウパニシャッドとティッティリーヤ・ウパニシャッドとブリハッドアーラニヤカは、ヤジュール・ヴェーダに属し、ブラシュナ・ウパニシャッドとムンダカ・ウパニシャッドは、アタルヴァ・ヴェーダに属している。アーラニヤカは、ブラーフmanaとウパニシャッドの中間の時代に位置しており、その名が示すように、森に暮らす人たちの瞑想の対象として役立つよう、意図され

ている。ブラーフマナは、一家の主が守るべき儀礼について、論じたものであるが、<sup>あるじ</sup>主が年を取って森にこもるときには、儀礼に代わるものが必要になる。それが、アーラニヤカを通して与えられ、供犠の祭儀がもつ象徴的かつ霊的な様相が瞑想されて、この瞑想が、供犠を行う代わりになるのである。アーラニヤカは、ブラーフマナの儀礼とウパニシャッドの哲学を結ぶ、移行の環になっている。讃歌が詩人の創作であるのに対して<sup>3)</sup>、ブラーフマナは僧侶の作品であり、ウパニシャッドは哲学者の瞑想である。讃歌の本質に基づく宗教と、ブラーフマナの掟に基づく宗教と、ウパニシャッドのスピリットに基づく宗教は、宗教の発展をめぐるヘーゲルの考え方の、三つの区分にぴったり対応している。これら三つの宗教は、後の段階になると、並行して存在するようになったが、もともとは、異なる時期に、継続的に展開されたものであることは、間違いない。ウパニシャッドは、ある意味では、ヴェーダの崇拜を引き継ぐものであるが、別の意味では、ブラーフマナの宗教に対する抗議にもなっているのである。

## II

### ヴェーダ讃歌研究の重要性

インドの思考を、ともかく十分に評価するためには、リグ・ヴェーダ讃歌を研究することが不可欠である。私たちが、これらを、形成途上の神話だとか未完成のたとえ話、曖昧なグループ分けだとか未熟な構成などと考えようと、これらが、インド・アーリア人のその後の慣習や哲学の源であることに変わりはない。そこで、その後の思考を適切に理解するには、これらの研究が、どうしても必要になる。この世の神秘を理解して、これを表現しようとする、人間精神のこれら最初の努力には、春の息吹や、<sup>あした</sup>朝に咲く野辺の花のような、飾り気のない爽やかさや、得も言われぬ魅力が、感じられる。



私たちが所有するヴェーダのテキストは、アーリヤ人が元々の故郷を離れてインドの地を目指した頃の、知的活動期からもたらされた。彼らは、やがてインドの地で展開されて、そこで保たれることになる、幾ばくかの観念や信仰を携えていったのである。これらの讃歌が作られて編集されるまでには、長い中間期間が続いたはずである。マックス・ミュラー Max Müller は、サムヒター期を、チャンダス期とマントラ期と呼ばれる二つ時期に分けている<sup>4)</sup>。チャンダス期に讃歌が作られた。それは、本格的詩文を特徴とした創造力豊かな時期で、人間の感情が、歌になって溢れ出したのである。その頃には、生贄の痕跡は見当たらない。神々には、ただ祈りだけが捧げられていたからだ。マントラ期は、集成もしくは組織立ったグループ分けの時期である。諸々の讃歌が、現在の姿と実質上同じ形に整えられたのは、この時期である。この時期に、供犠の観念が、ゆっくりと様々な形で発達していった。正確に言って、讃歌がいつ作られて集成されたのかは、憶測の域を出ないが、それらが、紀元前のおよそ15世紀間にわたって流布してきたことは、間違いない。紀元前5世紀にインドの地に広がり始めた仏教は、ヴェーダ讃歌の存在を前提にしているばかりか、ブラーフマナおよびウパニシャッドを含むヴェーダの文献全体をも、前提にしている。ブラーフマナの供犠のシステムが十分に整うためには、また、ウパニシャッドの哲学が、十分に発達するためには、長い期間を擁したものと思われる<sup>5)</sup>。この膨大な文献にはっきり見て取れる思考の展開には、少なくとも千年は必要である。この文献が示している多様性と成長を思い起こせば、1,000年という期間は長すぎない。インド学者の中には、ヴェーダの讃歌を、紀元前3,000年とする者もいれば、紀元前6,000年とする者もいる。故ティラク Tilak 氏は、讃歌の年代は紀元前4,500年とし、ブラーフマナの年代は紀元前2,500年とし、初期ウパニシャッドの年代は紀元前1,600年としている。ヤーコビ Jacobi は、讃歌の年代を、紀元前4,500年に位置づけている。私たちは、讃歌の年代を紀元前15世紀に割り当てているが、私たちの推定時期が早すぎると言って、非難されるこ

とはないものと思う。

リグ・ヴェーダのサムヒターもしくは集成は、1,017のスークタ *sūkta*, 即ち讃歌から成り、縮めて10,600ほどのスタンザをカバーしている。それは、8つのアシタカ *aṣṭaka*<sup>6)</sup>に分かれ、各アシタカは、8つのアディヤーヤ *adhyaīya*, 即ち章を持ち、さらにそれらの章は、ヴァルガ *varga*, 即ちグループに分かれている。だが、このサムヒターは、10のマンダラ *maṇḍala*, 即ちサークルに分かれていることもあり、後者の区分の方が、一般的である。最初のマンダラは、191の讃歌を含んでいて、大まかに言って、ガウタマ *Gautama*, カンヴァ *Kanva* など、15人の異なるリシ *Rishis* (預言者もしくは賢者)の著作とされている。アグニに呼びかける讃歌が最初に来て、インドラに呼びかける讃歌が次に続いて、という具合になっている。次の6つのマンダラはどれも、それぞれ単一家系に属する詩人たちの手になるものとされて、同じ配列法に従っている。しかし8番目のマンダラには、はっきりした順序がない。それは、最初のマンダラ同様、多くの異なった著者の作とされている。9番目のマンダラは、ソーマ神 *Soma* に呼びかける讃歌からなっている。8番目と9番目の讃歌の多くは、サーマ・ヴェーダにも見られるものである。10番目のマンダラは、後世の追加と思われる。いずれにせよ、これは、ヴェーダ讃歌の展開の最後の時期に流布していた見方を含んでいる。ここでは、初期の信仰心に満ちた詩が湛えていた自然な色合いが、哲学的思考の青白い影で、生氣のないものになっている。天地創造の起源をめぐる思弁的讃歌にも、出合うことが出来る。ここでは、こうした抽象的な理屈の歌と並んで、アタルヴァ・ヴェーダ期に属する超自然的呪術や悪魔祓いなども、見られる。諸々の思弁的な部分は、初めは抒情的な讃歌となって顕れた心が、成熟を遂げたことを示しているが、それはまた同時に、その頃までには、ヴェーダ期のアーリヤ人は、先住インド人の教理や慣習に通じるようになっていた違いがないということをも示していて、これら2つの事柄が、10番目のマンダラの起源が遅い時期に属することを、はっきり示している

のである。

### III

#### ヴェーダの教え

ヴェーダ讃歌のスピリットについては、こうした古代の文献研究に生涯を捧げた有力な学者たちから、異なる見解が主張されている。フライデラー Pfleiderer は、「リグ・ヴェーダの、子供のように素朴な原始的な祈り」について語っており、ピクテット Pictet は、リグ・ヴェーダのアーリヤ人は、それがどんなに曖昧で原初的なものであっても、一神教を奉じていたのだと主張している。アーリヤ・サマージの創設者であるリス Rith とダヤーナンダ・サラスヴァティー Dayānanda Sarasvati は、この見解に同意している。ラム・モーハン・ローイ Ram Mohan Roy は、ヴェーダの神々は「至高の神格」の属性を比喩的に表現したものだと考えている。その他の学者、特にブルームフィールド Bloomfield によれば、リグ・ヴェーダの讃歌は、ものものしい儀式に重きを置く原始民族の、供犠用の創作だという。バーゲイン Bergaigne は、それらは、すべて寓意的なものだと主張している。インドの著名な注釈者であるサーヤナ Sāyaṇa は、讃歌の神々についての自然主義的解釈を採用しており、近代ヨーロッパの学者たちは、この見解を支持している。またサーヤナは、ヴェーダ讃歌を、後のブラーフマナの宗教のスピリットを通して解釈していることもある。これらさまざまな意見は、互いに対立するものと見なす必要はない。これらは、リグ・ヴェーダの集成の異種混成的性質を示唆しているに過ぎないからだ。この集成は、互いに異なる世代の思想家たちの思考を表現した作品であるところから、互いに異なる思考の層を含んでいるのである。リグ・ヴェーダは、概して、まだ素朴な時代の宗教を表わしているのだと言ってよい。讃歌の大部分は、単純かつ素朴

で、まだ後期のソフィスティケーションに染まっていない心の宗教的意識を表現しているのであるが、後のブラーフマナの形式的かつ慣習的な時代に属する讃歌も、存在している。とりわけ最後の巻には、この世とこの世における人間の位置をめぐる意識的反省の、成熟した結果を具体的に示す讃歌も、含まれている。リグ・ヴェーダ讃歌のなかには、一神教が特徴となっているものもある。複数の神々が、時として、「普遍的存在」の互いに異なる名称及び表現と見なされていることは、確かである<sup>7)</sup>。しかし、この一神教は、近代世界の輪郭鮮やかな一神教には、まだなっていない。

インドの偉大な神秘家でもあり偉大な学者でもあるオーロピンド・ゴーシュ氏の意見では、ヴェーダは、秘密の教理と神秘哲学を示唆するもので溢れている。彼は、讃歌の神々を、心理的機能のシンボルと見なすのである。スーリヤは知性の、アグニは意志の、ソーマは感情のシンボルだ、というように。彼にとってヴェーダは、古代ギリシャのオルフェウスの教義やエレウシスの教義に相当するような、神秘宗教なのである。「私が提出する仮説によれば、リグ・ヴェーダそのものは、人類の思考の早い時期から私たちのもとに残された、一つの注目すべき文書であって、エレウシスやオルフェウスの歴史上の神秘も、当の文書の、欠損を抱えた断片なのだ。そのころ、人類の霊的かつ心理的な知識は、今では突き止めることが難しくなってしまった理由から、その真義が、俗人からは護られ、秘伝を受けたものには開示されるといった、もろもろの具体的かつ物質的な形象やシンボルのヴェールを通して、隠されていたのである。この神秘主義の主導原理の一つは、自己認識の聖性および秘密性と、神々についての真の認識とにあって、彼らによれば、この叡智は、普通の人間には、不向きなうえ、おそらくは危険でさえあって、低俗で浄化されていないスピリットに開示されたら、少なくとも道徳の悪用や誤用にさらされて、道徳の喪失をも招きかねない、というのであった。そこで彼らは、俗人には効果的ではあっても不完全ではあるような外面的信仰と、秘伝を受けた者のための内面的規律という、二重の存在様式に訴えて、彼らの言語を、

エリートには靈的意味を持ち、一般信者には具体的意味を持つといった、二重の意味を持った言葉とイメージで、覆ったのである。ヴェーダの讃歌は、このような原理で構想され、構築されたのだ<sup>8)</sup>。この見解が、ヨーロッパの学者たちの近代的な見解に対立するばかりか、サーヤナや、ヴェーダ解釈の権威であるプールヴァ・ミーマーンサーのシステムなどにも、対立するものであることを思うと、その見解がどんなに天才的なものであろうと、オーロピンド・ゴシュ氏の先導に従うことには、私たちは躊躇しないわけにはかない。インドの思考の全展開が、ヴェーダ讃歌の最高の靈的真理からの着実な低下であったとは、考えにくいからだ。その展開は、人間の発達の一般的性質について知られている事柄に、いっそう一致しているばかりか、後の宗教や哲学は、最初の完成状態からの劣化であると考えられるよりも、むしろ、早いころの精神の、素朴な示唆や、初歩的道德観念や、靈的切望などから生まれたものだと認める方が、いっそう容易でもあるからだ。

ヴェーダ讃歌のスピリットの解釈では、私たちは、そのすぐ後にやってきたブラーフマナとウパニシャッドによって受け入れられた見解を採用するよう、提案する。これら、より後の著作は、ヴェーダ讃歌の見解の継続であり、発展であるからだ。外面的な自然力に対する崇拜からウパニシャッドの靈的宗教への進展は、宗教の通常の成長法則に従って——人間は、地上のどこにおいても、外面的なものから出発して、内面的なものへと向かう——容易に理解できると思われるうえ、ウパニシャッドは、早期の自然崇拜などには目もくれずに、ヴェーダに含まれる最高の宗教の示唆するところを、ひたすら展開してもいるのである。この解釈は、近代歴史学の方法とも、早期の人類文化をめぐる科学理論とも、完全に調和するばかりか、サーヤナによって提出されたような古典的インド観とも十分に一致するのである。

## IV

## 哲学的傾向

リグ・ヴェーダには、感覚や外面的事象などをめぐる執拗な問いかけから逃れようとするかのような、原始的ではあっても詩的な魂の、熱のこもった発言がみられる。讃歌は、この世の神秘を、超人的な洞察や異常な啓示などには一切よらずに、裸の理性の光のみで説明しようとする度合いに応じて、哲学的となっていく。ヴェーダ讃歌で顕かにされる心は、一つのタイプには属さない。空の美しさや大地の驚異をつらつらおもんみて、讃歌を創ることで自分の音楽的魂をその重荷から解放した、詩的な魂もあった。天空神ディヤウス、司法神ヴァルナ、暁の女神ウシャス、友愛神ミトラ等々といったインド・イラン系の神々は、こうした詩的意識の所産である。いっそう積極的な気質の他の魂たちは、この世を、彼らの目的に合わせて調整しようとした。この世についての知識は、生活の指針として、彼らにとって重要であった。また、征服と戦いの時代には、雷雨神インドラのような役に立つ頼もしい神々が考えられた。純粹に哲学的衝動、つまりは、この世をただただ知って理解したいという願いは、こういう疾風怒濤の時代の終わりになって、初めて姿を現した。人間が腰を据えて、自分たちが何も考えずに崇拜してきた神々を疑い、生の神秘に思いを巡らすようになったのは、まさしくこの時期であった。人間の心が十分な答えを出せないような問いが、いろいろと持ち出されたのである。ヴェーダの詩人は、「私には、いったい自分がどんな類の存在なのかが、分からない。だから私は、神秘に閉じ込められて、あてどなくさ迷い歩くのだ」と叫んでいる。真の哲学の萌芽が現れるのは、もっと後の段階になってからだが、それでもやはり、ヴェーダ讃歌の詩歌や慣習に反映された生命・人生観は、教えるところが大きい。伝説的な歴史が考古学に先ん

じ、錬金術が化学に、占星術が天文学に先んずるように、神話学や詩作法もまた、哲学や科学に先行する。哲学の衝動は、神話及び宗教となって最初の表現を見る。そこに見いだされるのは、総じて人々が信じていた究極の实在をめぐる疑問への解答である。これらの解答は、神話的問題が現実世界の説明を当然してくれると思われている場合に、想像力の産物として、たまたま生まれてくるものである。理性が空想に対する優位を徐々に獲得するにつれて、恒常的なものと、それから出来ているこの世の現実のものどもを、見分けようとする試みが行われるようになる。宇宙論的思索が、神話学的仮説にとって代わるのである。そして、この世の恒常的な要素が神格化されると、宇宙論は宗教と混然一体化することになる。リグ・ヴェーダに見られるような思索の早い段階では、神話学と宇宙論と宗教が混じりあっているのが分かる。リグ・ヴェーダ讃歌に見られる見解を、神学、宇宙論、倫理学、終末論の四つの見出しのもとに、ざっと説明しておくのが、よいだろう。

## V

### 神 学

何世紀にもわたる宗教の成長は、簡単な定義と分類を許容するような、単純ですっきりした信条となることはできない。讃歌の驚くべき様相は、その多神教的性格にある。おびただしい数の神々が、名前を与えられて、崇拜される。しかし、讃歌の中には、その高度に抽象的な哲学的思索によって、私たちがびっくりさせるものもあるが、原始的な多神教から系統的な哲学への道のりは、長い、長い道りである。リグ・ヴェーダ讃歌の宗教では、三層の思考を区別することが出来る。即ち、自然主義的多神教の層と、一神教の層と、一元論の層が、それである。

ここで心に留めておくべき重要な点は、「デーヴァ」という言葉は、その

本質がきわめてとらえ所のないものなので、多くの異なった事柄を指し示している、ということである<sup>9)</sup>。「デーヴァとは、人に対して、(何かを)与えるもののことである」<sup>10)</sup>。神がデーヴァであるのは、神が全世界を与えるからだ。仲間の人間に知識を分かち与える学識ある者も、デーヴァである<sup>11)</sup>。太陽も、月も、空も、デーヴァであるのは、彼らが万物に光を与えるからだ。父も母も霊的指導者も、みんなデーヴァである<sup>12)</sup>。客人でさえも、デーヴァである。私たちは、神についての近代的な考え方に、せめて大まかにでも相当するようなデーヴァという観念だけを、考慮に入れておけば、それで良い。

人の心という工場で行われる神造りのプロセスが、リグ・ヴェーダほど明らかに見られる場所はない。そこでは、人間の心の、朝の爽やかな輝きが、過去の習慣や固定した慣例によって曇らされることのない生気を、まだ保っている。思想の歴史には、始まりといったものはないが、私たちはどこかから始めるしかない。私たちは、ヴェーダの神々を、その様相のある点では、ある種の自然力と同じものだと見なすことから始めて、その神々が、次第に、道徳的で超人的な存在へと高められていく様子を、指摘したらよい。ヴェーダ讃歌の最初期の預言者たちは、それぞれの素朴な無意識的な仕方、自然の光景に喜びを見出した。彼らは、本質的に詩人的気質を持っていたので、自然界の事象を、とても強烈な感情と想像力とをもって眺めたため、諸々の事象は魂の満ち満ちるものとなった。彼らには、自然を愛することが、どういうことか、曙と日の出の驚異に我を忘れることが、どういうことか、魂と自然の出会いを生み出すそうした神秘的プロセスが、どういうことかが、よく分かっていた。彼らにとって自然は、交わりを続けることのできる、生きた存在であった。自然の輝かしい様相のいくつかは、そこから神格が神無き大地を見下ろす、天上の窓となった。月と星、海と空は、神的存在と見なされた。こうした自然崇拜そのものが、ヴェーダ宗教の最初期の形態であった。

じきに冷たい反省が始まって、物事の内なる性質に迫りたいという無意識的な努力が、生まれることになる。人間は、自分のイメージに従って神々を



造ることに、忙しい。世界中の、未発達な人間の宗教は、一種の神人同型同性説である。私たちは物理的自然の混沌に、じっと従うことはできない。私たちは何とかそれを理解しようとして、何か仮説があるのは、ないよりましだという確信と共に、ある種の生命論に帰着する。私たちは、自分の意志を持った行為主体をおのずから投射して、現象を、その靈的原因から説明することになる<sup>13)</sup>。私たちは、あらゆる事象を、自分の本質との類似をもとに解釈して、物理的現象の背後に意志を措定する。この理論を、アニミズムと混同してはならない。これは、自然には遍く生命があると、主張するものではないからだ。これは、自然の驚くべき現象が——インドでは、これに満ち満ちている——神格化される、一種の多神教である。宗教的本能は、このようにして顕かになる。なんらかの差し迫った危機から解放されたり、自分が自然の圧倒的な力に全面的に依存していることに気付いたりした時、人は、深い宗教的感情に駆られて、神の存在をありありと感じる。人は、嵐の中に神の声を聴き、波の鎮まる現象に神の手を見るのだ。遙か下って、ストア派の時代に、私たちは同様の考え方に会うことになる。「神々と化した、日月辰星および法と人」<sup>14)</sup>。ヴェーダ期のアーリヤ人が、一つの見えざる世界の実在を深く信じたことは、素晴らしいことであった。彼はその実在を疑うことはなかった。神々は存在するのだ。自然主義と新人同型同性説とが、ヴェーダの宗教の第一段階だと思われる。

ヴェーダ期のアーリヤ人とイラン人は、同一の祖先から出ているので、たがいに大きな親和性と類似性をはっきり示しているというのは、今では歴史の常識である。彼らは共通の故郷から、インドとゾロアスター教のイランへと下ってきたのであるが、その中心の故郷では、生活上の必要や、空き地の欠如や、冒険へのスピリットなどが、故郷を離れて別の方向に新天地を求めてさまようことを強いるまでは、一つの分割されていない民族として、暮らしていたのである<sup>15)</sup>。インドとイランの古代の宗教と哲学に、実に多くの親和性が認められるのは、そのためである。ミルズ博士 Dr. Mills によれば、

「アヴェスターとヴェーダの距離の方が、ヴェーダとそれ自身のサンスクリット叙事詩の距離より、もっと近い」。言語の基底部にも、共通性が横たわっている。アーリヤ人が、パンジャブを通過してインドに着いたとき、ダスユと呼ばれる先住民族が、彼らの自由な行く手に立ちはだかっていた<sup>16)</sup>。このダスユたちは、肌の色が黒く、牛の肉を食べ、悪魔崇拜に耽っていた。アーリヤ人が彼らに出会った時、彼らにはあまり近づかないでいたいと願った。この、民族的誇りから生まれる排他性と文化的優越性のスピリットが、後のカーストのスピリットに発展して行った。自分たちの宗教を、汚染されずに純粋なままに保ちたいという願いが、自分たちの聖典の集成へと向かわせたのである。集成を意味するサムヒターという言葉は、リグ・ヴェーダ讃歌は、アーリヤ人がインドの地で非アーリヤ人に出会った時期に集成されたのだということ、意味している。二つの姉妹民族が、別々になる前に、共通に抱いていたインド・イランの神々のスケッチと並んで、ヴェーダの神々のスケッチを、始めてみよう。

この世が不完全だという感情、人間は弱い者だという感情、人間が失意にあるときに訴えて、それに依拠することの出来る、より高いスピリットや、導き手や、友や、支えなどが欲しいという感情。これらはどれも、人間の病める心にとっては自然なものばかりである。こうした早い時代には、果てしなく輝かしい天空ほど、無限者を求める感情に伝えてくれるものはなかった。太陽も月も星々も変化し、嵐も吹き荒れ、雲も逆まき消えていくのに、空だけは、永久にそこに留まっているからだ。天空神ディヤウスは<sup>17)</sup>、インド・イランの神であるだけでなく、インド・ヨーロッパの神でもある。それは、ギリシャではゼウスとして、イタリアではジュピターとして、チュートン族の間ではティールおよびティとして、姿をとどめている。デーヴァというのは、元々は輝かしいという意味であったが、後に、太陽、空、星、曙、昼間など、輝かしいもの一切に用いられるようになった。そしてそれは、輝かしいものすべてに共通な特徴を含意する、一般名辞となったのである。大地も

また、じきに神格化されることとなった。はじめ天と地は、おそらく、果てしない広大さや、豊かな生産力といった物理的側面しか、持っていなかったのであろう<sup>18)</sup>。大地に帰せられる属性と言えば、「蜜をもたらす」とか「ミルクに満ちた」とかである。ところが、ごく早いころに、天と地は、「衰えることのない」とか、「父」や「母」といった、人間的性質を付与されるようになった。恩恵、全知、正義といった道徳的属性も、加えられていった<sup>19)</sup>。おそらく、物理的なものから人格的なものへの、人格的なものから神的なものへの、着実な前進があったのであろう。世界中の最初の崇拜対象である天と地は、おそらく初めは独立の存在と見なされていたのに、じきに結婚の同盟者となっていった。大地は、天によって受胎にいたる実り豊かな母なるものであった。ホメロスの讃歌では、大地は、「神々の母、星空の妻」<sup>20)</sup>と呼ばれている。天と地は、あらゆる生き物に命を与えて、彼らに生きる糧を与える普遍的な両親である。リグ・ヴェーダでは、ただ一つ概念を形成する二者一体の存在たちと、複数で呼びかけられている。両者の間にあって、太陽も、曙も、月も、風も、雨も、みんな、両者の子孫であるからだ。彼らはまた、人間たちと神々の両親でもある<sup>21)</sup>。神々の数が増えるにつれて、いったい誰が天と地を造ったのか、という疑問が生まれた。「彼は、実に、神々のうちにあつて最も利発な働き手として、あらゆるものに喜びを与える彼(か)の輝かしき者たち(天と地)を産んだのだ。彼は、二人の輝かしき者たちを、自らの智慧によって量り、この二人を、永遠の台座に据える」<sup>22)</sup>。この創造的な力は、アグニ神<sup>23)</sup>や、インドラ神<sup>24)</sup>や、ソーマ神<sup>25)</sup>のものでされている。他の神々もまた、この名誉を求めて、参入するのである<sup>26)</sup>。

ヴァルナは、天空の神である。この名称は、「覆う」とか「囲む」を意味する「var」から来ている。彼は、ギリシャのウラノスや、アヴェスターのアフラ・マズダーと同じである。彼の物理的起源は、明白である。彼は、包む者もしくは抱く者である。彼は、星の輝く全天を、「衣をもってするよう

に、そこに住むすべての生き物とその棲家をもって、覆う」<sup>27)</sup>。ミトラは、彼の変わらざる仲間である。ヴァルナとミトラというように、同時に用いられるときは、夜と昼、闇と光を表わす。ヴァルナ像は、着実な変遷をたどって、ついにはヴェーダの最も道徳的な神にまでなる。彼はこの世を監視して、悪しき行いをする者を罰し、彼の許しを乞う者の罪を許す。太陽は彼の眼であり、空は彼の衣、台風は彼の息である<sup>28)</sup>。河は、彼の命を受けて流れ<sup>29)</sup>、彼を恐れて、太陽は輝き、星と月はその軌道をめぐる<sup>30)</sup>。彼の法によって、天と地は分かれている。彼は物理的秩序と道徳的秩序を維持する。彼は、気紛れな神ではなく、「ドゥリタヴラタ」*dhṛtavrata*、即ち「決意揺るぎなき者」である。他の神々は彼の命に従う。彼は、全知なる者として、空飛ぶ鳥の行く道も、海渡る船の道も、そら分ける風の道も、お見通しである。一羽の雀も、彼に知られず墜ちることはできない。彼は、至高の神であり、神々の神であって、罪ある者には厳しく、悔い改める者には慈悲深い。彼は、自分の打ち立てた道徳的世界の、永遠の法に従う。しかし、彼は、自分を傷つける者たちをも、慈悲によって、すすんで許す。「彼は、罪を犯した者に対しても、慈悲深い」<sup>31)</sup>。私たちは、ヴァルナに対するほとんどすべての讃歌を通して、罪責感に駆られた告白と悔い改めに満ちた、罪の許しを求める祈りを見出す<sup>32)</sup>。これは、アーリヤの詩人たちが、罪の重荷と祈りの感覚を抱いていたことを示している。

ヴァイシュナヴァとヴァーガヴァタの有神論は、絶対帰依の信仰、バクティの強調によって、罪の意識と神の許しへの信頼を伴うヴェーダのヴァルナ信仰にまで、遡ることができる。マクドネル Macdonell 教授によれば「ヴァルナの性格は、昂揚的タイプの一神教信仰における、支配神の性格に似ている」<sup>33)</sup>。

ヴァルナが守衛を務めている法は、天則リタ *Rita* と呼ばれる。Rita というのは、文字どおりの意味では「物事の筋道」のことである。それは、法一般と、正義の内在とを表わしている。この考え方は、はじめは、日月星辰の運動や、昼夜の交代や、四季の巡りなどの規則性によって、示唆されたもの

であろう。リタは、この世の秩序の象徴である。宇宙において秩序だったものはすべて、リタを原理としている。それは、プラトンの普遍者 the universals に対応している<sup>34)</sup>。経験的世界は、いかなる激動のうちにあっても変化することのない、恒常的実在、リタの思索の影である。ヴェーダの預言者たちは、普遍が特殊に先行するように、リタもまた、一切の現象の顕現に先立って実在すると考える。この世における様々な連続的变化は、恒常的なリタが採る多様な表現である。そこでリタは、万物の父と呼ばれることになる。「マルト神群は、遙かりタの座からやってくる」<sup>35)</sup>。ヴィシュヌは、リタの胎芽である<sup>36)</sup>。天と地が今ある姿を採っているのは、リタの故である<sup>37)</sup>。ある不変の実在をめぐって神秘主義的考え方に傾いていく傾向は、ここに最初の徴がある。真の実在 the real は、不変の法である。現にあるものは、一種のめまぐるしいショーであり、不完全なコピーである。多くのものは、変化し、過ぎ去っていくのに対して、真の現実には、部分もなければ、変化もない。この宇宙的秩序が、じきに、至高の神の確固たる意志となり、また、徳性と正義の法ともなっていく。神々とても、これを跨ぎ越すことはできない。私たちは、リタについての考え方の中に、物理的なものから神的なものへの発展を認める。もともとリタは、「この世の、日月星辰の、朝晩、昼夜の、確立された筋道」を、意味するものであったが、それは、次第に、人間が従う徳性の道となり、神々さえもが遵守すべき正義の法となっていく。「曙は、正しき道として、リタの道に従う。あたかも、それらを、あらかじめ知っていたかのように。彼女が境界を踏み越えることは、決してない。太陽は、リタの道に従う」<sup>38)</sup>。全宇宙がリタの上に基礎づけられ、リタのうちで動くのである<sup>39)</sup>。リタについてのこういう考え方は、ワーズワースの義務への祈願を思い起こさせる。

御身は、星々を誤りから守り、

遙か古の天たちも、御身によって、今なお爽やかで、強くあるのだ。

法の物理的世界に対する関係は、徳の道德世界に対する関係に等しい。ここには、道德的生活を、調和もしくは秩序だった全体と考えるギリシャ的な考え方が、示されている。はじめは物理的秩序の護り手であったヴァルナが、道德的秩序の守衛となり、罪の罰し手となる。多くの場合、神々への祈りは、私たちが正しい道を踏み外さないことを、目指している。「おお、インドラよ、私たちを、リタの道に、あらゆる悪を凌ぐリタの道へと、導きたまえ」<sup>40</sup>。

リタをめぐる考え方が認められると、すぐに、神々の本質に変化が生じた。この世はもはや偶然的要素の盲目的怒りを表わす渾沌などではなく、調和のとれた目的を持った営みの場であるのだ。この信念は、不信が私たちを<sup>なめ</sup>験して、自分への確信が砕かれるたびに、安全な台座を与えてくれる。何が起ころうと、道德的世界には、正義の法が存在していて、自然の美しい秩序に<sup>なめ</sup>応えてくれるのだと、私たちは思う。明日も太陽が昇ることは確かなように、徳が勝利を収めることになるはずだ。リタは、信頼しても、大丈夫なのだ。

ミトラは、ヴァルナの仲間なので、一般にはヴァルナと一緒に祈願される。ミトラは、太陽を表わすこともあれば、光を表わすこともある。彼はまた、一切を見通して、真理を愛する神でもある。ミトラとヴァルナは、二者一体の、リタの護り手にして、罪の許し手でもある。次第に、ミトラは朝の光と結びつき、ヴァルナは夜空と結びつくようになる。ヴァルナとミトラは、アリヤマン Aryaman とバガ Bhaga と並んで、アーディティヤ、即ち無限なる大母神アディティの息子たちと呼ばれるようになる。

スーリヤは、太陽である。彼は、およそ 10 の讃歌で呼びかけられている。太陽への崇拜は、人間の心には自然なことである。それは、ギリシャの宗教の本質的な部分をなしている。プラトンは、『共和国』の中で、太陽崇拜を理想化している。彼にとって太陽は「善」のシンボルであった。ペルシアでも、太陽崇拜がみられる。太陽は、この世のあらゆる光と生命の造り手として、彼に帰せられる様々な超自然的力をもっている。彼は、「動くもの、立ち止まるもの一切の」命である。彼は、一切を見通す、この世のスパイであ

る。彼は人間を目覚めさせて、その活動につけ、闇を払って光を与える。「スーリヤは今、二つの世界の歩みを整えようと、立ち上がるところだ。進みゆくもの留まるもの一切の守護者として、人間たちのあいだの理非曲直をじっと見つめながら」<sup>41)</sup>。スーリヤは、この世の創造主にして、この世の支配者となるのである。

11の讃歌を丸々費やして讃えられるサーヴィトリも、太陽神である。彼は、金色の眼と、金色の手と、金色の舌を持つものと説明される。彼は、しばしば太陽と同じだとされているが、太陽とは別だとされることもある<sup>42)</sup>。サーヴィトリは、金色に耀く昼間の輝かしい太陽を表わすだけではなく、眼には見えない夜の太陽をも表しているからだ。彼は道徳の高貴な面を体現しているので、罪の許しを求める悔い改めた罪びとによって懇願される。「私たちが、主なる天を、頼りない理解や、弱さや、プライドや、人間性などによって、どんなに傷つけようと、おおサーヴィトリよ、私たちからこの罪を、取り上げてください」<sup>43)</sup>。ガーヤत्री讃歌は、サーヴィトリという形をとったスーリヤ神に向かって、呼びかけられる。「さあ、サーヴィトリの、彼の慕わしき栄光をめぐるって瞑想しよう。どうぞ彼が、私たちの心を教化して下さるように」。ヤジュール・ヴェーダからしばしば引用される讃歌の、「おお、サーヴィトリ神、一切万物の創造主よ、諸々の障害を取り除いて、祝福を垂れたまえ」は、サーヴィトリに向かって呼びかけられている。

ヴィシュヌ神という形をとる太陽神スーリヤは、諸々の世界を支えている<sup>44)</sup>。ヴィシュヌ神は、三步で世界を踏破する神である。彼は、大地と天と、死すべき者の観ることのできる一切の最高世界を踏破する。彼の偉大さの限界に達しうるものは、皆無である。「私たちは、大地から、あなたの踏破する二つの領域は存じています。おおヴィシュヌ神よ、さらに高いあなた自身の最高の住まいは、一人あなただけが知っているのです」<sup>45)</sup>。ヴィシュヌ神は、行く手には偉大な未来が開けているのに、リグ・ヴェーダでは従属的地位に甘んじている。けれども、ヴィシュヌ派の基盤は、リグ・ヴェーダに

見いだされるのであって、ここでは、ヴィシュヌ神は、「偉大なる体」brhatśarīrah, 即ち「世界を体とする者」とか、「プラティエーティ・アーハヴァム pratyety āhavam」, 即ち「帰依者の招きに応じてお越しになる者」などと、説明されている<sup>46)</sup>。彼は、悲嘆にくれる人のために、大地を三度踏破したと言われている<sup>47)</sup>。

プーシャン神も今一柱の太陽神である。彼は、田園神および家畜の護り手として、明らかに人間の友である。彼は、徒歩旅行者や農夫の神でもある。

ラスキンによれば「曙の荘厳さほど、深遠で荘重なものはない」。朝毎に光と命の閃光を放つ果てしない曙は、ギリシャのエオスに当たる女神ウーシャスとなる。アシュヴィン双神に愛される朝の輝く侍女ウーシャスは、アシュヴィン双神がその黄金の光線で彼女を胸に抱こうとすると、彼を前に消えていく。

アシュヴィン双神は、およそ15の讃歌で勧請され、他の多くの讃歌でも、部分的に招来される<sup>48)</sup>。彼らは、互に切り離せない双子の、光彩陸離たる耀ける主であって、猛く、素早く、早きこと、鶯のごとくである。彼らは天空の子供たちで、曙は、二人の姉妹である。黄昏の現象が、二人の物質的基盤だと思われる。そこで二人は、それぞれ曙と夕暮れに対応することになる。彼らは次第に神々と人間たちの医師となり、奇跡を現するものとなり、夫婦の愛と生活の守護者となり、ありとある苦しみに打ちひしがれた者たちの解放者となる。

何人かのアーディティヤたちを産むアディティについては、すでに言及した。アディティの文字通りの意味は、「拘束のないとか、制約のない」である。それは、私たちの四方八方を取り巻く、見えざるもの、無限なるものの名称のように思われるが、それはまた、大地と雲と空を越えて広がる、果てしない広がりをも表わしている。それは、ここにあると同時にここを越えてもいる、一切の広大な基層である。「アディティは、空であり、中間領域であり、父であり母であり息子である。アディティは、すべての神々であり、



5つの部族である。アディティは、すでに生まれているものの一切であり、やがて生まれるものの一切である」<sup>49)</sup>。ここにおいて私たちは、一切を抱きとめる普遍者、一切を産み出す自然そのもの、計り知れない潜在性、サーンキャ哲学の説く根本原質、ブラクリティを持つことになる。これは、アナクシマン드로スのト・アペイロン、「無限なるもの」に対応する。

神とされる重要な自然現象に、火がある。火神アグニ<sup>50)</sup>は、重要性において、インドラに次ぐ第二の神として、少なくとも200の讃歌で呼びかけられている。アグニという観念は、その熱によって燃えないものにまで火をつけてしまう、じりじりと焼けつくような太陽から生まれた。それはまた、雷光を放つ雲からも来ている。火打石にも起源がある<sup>51)</sup>。火越し棒<sup>おこし</sup>からも来ている<sup>52)</sup>。プロメテウスのように、マータリシュヴァンは、空から火を持ち帰って、これをブリグ族の世話に任せただと思われている<sup>53)</sup>。黄褐色のあご髭と、とがった顎と、燃え立つような歯を持った、アグニの説明に見られる物理的様相は、一目瞭然である。薪とギーが彼の食べ物である。彼は、夜の闇を払う太陽のように輝く。彼が森に分け入るとき、その道は暗く、彼の声は、天に響く雷のようだ。彼は、煙立つ光線、ドゥーマケートゥ dhūmaketu として、煙を自分の旗印にしている。「おお、アグニ神よ、私が捧げるこの丸太を受けとり給え。これを明るく燃え立たせて、聖なる煙を立ち昇らせ、御身のたてがみで天の頂に触れて、太陽の光線と立ち混じり給え」<sup>54)</sup>。このように、火は、地上の炉床や祭壇にだけ存在するのではなく、太陽や曙のように、また雲の中の雷光のように、空にも、大気の中にも、存在している。この概念は、次第に抽象的になるにつれて、ますます崇高なものになっていく。彼は、神々と人間の仲立ちとなり、あらゆるものの助け手となる「おお、アグニ神よ、ヴァルナ神を、私たちの捧げもののところまで、お連れ下さい。空からインドラ神を、大気からマルト神を、お連れ下さい」<sup>55)</sup>。「私は、アグニ神を、わが父とも、血族とも思うのです。我が兄弟とも、友人とも思うのです」<sup>56)</sup>。

インスピレーションの神にして、不死の生命の与え手、ソーマは、アヴェスターのハオマヤ、ギリシャのワインと葡萄の神、デオニソスに類似している。これらはすべて、人を酔わせるものへの崇拜である。哀れな人は、自分の悲しみを紛らわせてくれるあれこれのものを要求する。人を酔わせる飲み物を初めて飲んだ時、彼は、喜びに打ち震える。彼は、確かに、頭がおかしくなるが、これは、聖なる狂気だと考える。私たちが、靈的ヴィジョン、突然のひらめき、より深い洞察、溢れる慈悲心、一段と広がった理解力などと呼ぶものは、みんな、魂のインスピレーションを受けた状態に付随するものである。スピリットを高揚させる飲み物が、聖なる飲み物になることに、不思議はない。ホイットニーは、次のように述べている。「その全宗教が、自然の素晴らしい力や現象の崇拜にあった、単純な心のアーリアの人たちは、その液体には、スピリットを高揚させて、個人に並外れた行為を促して、これを可能にするような影響を与えることで、一時的な熱狂を産み出す力があることを認めるや、直ちに、それには聖なるものが宿っていることに気付いたのだ。それは、彼らの理解からすると、それが入った者たちに、神のごとき力を授けてくれる一柱の神なのであった。そういう力をもたらしてくれた植物は、彼らにとっては、植物の王様となり、調合のプロセスは、それ自体が神聖な供犠となった。したがって、用いられる道具も聖なるものとなった。こういう祭式が古代の風習となっていたことは、それがおこなわれていることをしめす言及が、ペルシアのアヴェスターの中にあることで、立証されているが、それは、インドの領域では、新しい衝撃に出会ったように思われる」<sup>57)</sup>。ソーマは、完全に人格化されたわけではない。この植物とジュースは、詩人自身の心においてきわめて活発に働くので、詩人はこれを容易に神格化することはできないのだ。ソーマに呼びかけられた讃歌は、このジュースが当の植物から絞られている間に詠われるよう、意図されている。「インドラが飲むように注がれる、おお、ソーマよ、どこまでも清らかに、いとも甘美で、こころを浮き立たせる流れとなって、流れ続けたまえ」<sup>58)</sup>。リグ・

ヴェーダの viii, 48, 3 では、ソーマの崇拜者は、次のように叫んでいる。「私たちは、ソーマを飲みました。私たちは不死になって、光の中に入りました。私たちは神々を知ったのです」と。霊的エクスタシーと物理的酩酊のこういう混乱は、ヴェーダの時代に特有なものではない。ウィリアム・ジェームズも、酔っぱらった意識は、神秘家の意識に、少し似ていると言っている。私たちは、物理的酩酊によって、神的存在に達することが出来ると、信じられている。ソーマは、次第に医学的力を獲得して、眼の見えない者を助けて、眼が見えるようにし、歩けない者を助けて、歩けるようにするようになる<sup>59</sup>。ソーマに捧げられた次の美しい讃歌は、ヴェーダ期のアーリヤ人の気持ちの中では、ソーマを飲む場所がどんなに重要であるかを、示している。

この世にあって、永遠の光があるところ、不死にして不滅なる世界にあって、太陽の見えるところ、おお、ソーマよ、そこに、私を置きたまえ。ヴィヴァスヴァットの息子が王として支配しているところ、天の、秘密の場所があるところ、これら力強い流れのあるところ、そこで、私を不死なるものにしたまえ。

天空の第三天にあって、生命が自由なところ、諸々の世界がこぞって耀いているところ、そこで、私を不死なる者にしたまえ。

望みや願いのあるところ、輝かしいソーマを注ぐお椀のあるところ、食べ物と喜びのあるところ、そこで、私を不死なるものにしたまえ。

幸せと歓びがあるところ、喜びと楽しみが住まうところ、私たちの願いという願いが叶えられるところ、そこで、私を不死なる者にしたまえ<sup>60</sup>。

今引用したソーマへの讃歌では、ヴィヴァスヴァットの息子に言及されているが、彼は、リグ・ヴェーダのヤマ Yama の息子で、アヴェスターのヴィヴァンフヴァント Vivanhvant の息子、イマ Yima に当たる。ヤマに向け

られた讃歌は3つある。彼は、死者の頭（かしら）で、神ではなく、死者を治める者である。彼は、死すべき者どものうち、最初に死んで、彼岸への道に分け入った者であり、父祖の道を初めて辿った者である<sup>61)</sup>。後に彼は、新参者を迎えるホストとして振る舞う。彼は、死者の国の王様であるが、それは、そこでの経験が最も長いからだ。彼は、日没の神として勧請されることもある<sup>62)</sup>。ブラーフマナでは、人を裁いて懲らしめる者となるが、リグ・ヴェーダでは、まだ、ただの王様である。ヤマは、ルキアヌスがヘラクレイトスの口を借りて言った台詞、「人間とは何者か。死すべき神々か。神々とは何者か。不死なる人間か」の真実を、具体的に例示している。

パルジャニヤ Parjanya は、アーリヤの天空の神であったが、アーリヤ人のインド侵入後に、インドラになったようだ。インドラは、アーリヤ人の他のどの一族にも知られていないからである。ヴェーダでは、パルジャニヤは空の別名である。「大地が母であり、私は大地の息子である。パルジャニヤが父なのだ。父よ、どうか私たちを助けたまえ」<sup>63)</sup>。アタルヴァ・ヴェーダでは、大地は、パルジャニヤの妻と呼ばれている<sup>64)</sup>。パルジャニヤは、雲と雨の神である<sup>65)</sup>。彼は、全世界を神として治めている。あらゆる生き物は、彼のおかげによっているからだ。彼は、動くもの留まるもの一切の、命である<sup>66)</sup>。パルジャニヤという言葉が、また、雲や雨の意味で用いられている箇所も、ある<sup>67)</sup>。マックス・ミュラーの意見では、パルジャニヤは、ペルクナスと呼ばれるリトアニアの雷神と同じだという<sup>68)</sup>。

畏怖心と恐怖心を喚起する自然現象のうち、激しい雷雨に匹敵しうるものはない。「そう、私が雷と雷光を放てば、君は、私を信じるはずだ」と、インドラは言う。彼に呼びかけられた讃歌からすると、インドラが、ヴェーダの中で最も人気の高い神である。アーリヤ人がインドに入ってみると、インドの豊かさは、一重に、雨のあるなしによっていることが分かった。雨の神は、おのずからインド・アーリヤ民族の国民的な神となる。インドラは、大気現象の神であり、青空の神である。彼は、インドのゼウスである。彼の自

然における起源は、明らかである。彼は水と雲から生まれる。彼は雷電を自在に用いて、闇を制覇する。彼は私たちに光と命をもたらし、私たちに力と新鮮さを与える。天は、彼の前に頭を垂れ、大地は、彼が近づくと、うち震える。次第に、インドラの、空と激しい雷雨との結びつきが忘れられていく。彼は、神的スピリットとなり、全世界と全生物の統治者となって、あらゆるものに眼と耳を向け、人間には、一番相応しい考えや衝動を吹き込む者となる<sup>69)</sup>。干ばつというデーモンと闇を征服してくれる激しい嵐の神は、アーリヤ人の先住民族との戦いにおける、戦勝の神となる。時代は激しく動いていて、人々は征服と支配の冒険に明け暮れていたが、インドラは、異質の信仰を持つ先住民族とは、何のかかわりも持たないであろう。「生まれた途端に神々を庇護し、その力を前にしては、天界も地界も戦く英雄神。諸君よ、それがインドラなのだ。素早く大地を造って、山を重ね、大気の広がり測って、天を支える英雄神。諸君よ、それがインドラなのだ。大蛇を屠って、7つの河を開放し、戦いの大槌として、牛たちを救出する英雄神。諸君よ、それがインドラなのだ。諸君が疑いをもって、いったいどこにいるのかと尋ねてもいないので、馬鹿にしていると、敵の持ち物を吹き散らしてくれるので、ついに信じるころとなる、恐るべき神。諸君よ、それがインドラなのだ。その助けなくしては、人が征服することは決してなく、気が付くと、その矢が、もう邪悪な者どもを殺してくれている、英雄神。それがインドラなのだ」<sup>70)</sup>。このチャンピオン神は、最高の神的属性を獲得して、空と地、海と山を統治し<sup>71)</sup>、ヴェーダのパンテオンにおける最高の地位から、次第にヴァルナを退去させてしまう。正義と清らかさを湛えて、一貫した目的を内に秘めた、王侯然たるヴァルナは、アーリヤ人が突入した闘争と征服の活動的な時代に不適合である。そこで私たちは、ヴェーダ世界のこの大革命のこだまを、いくつかの讃歌のうちに聴き取ることになるのである<sup>72)</sup>。

インドラもまた、インドに定住した様々な部族が崇拜する神々と戦わなければならなかった。河の崇拜者<sup>73)</sup>、アシュヴァッタ樹が様々な存在した<sup>74)</sup>。

インドラが戦った悪鬼の多くは、大蛇、ヴリトラのような部族神たちであった<sup>75)</sup>。リグ・ヴェーダ期におけるインドラの、また別の敵は、クリシュナと呼ばれる部族の神格化された英雄、クリシュナであった。詩では、次のように詠われている。「駿足のクリシュナは、一万の群団を率いて、アムシュマティ（ジウムナ）河の堤のほとりに暮らしていた。叡智溢れるインドラは、この、大声で号令を発する頭目の存在を、知ることになった。インドラは、我らが利益のために、略奪を重ねるこのリーダーを、打ち滅ぼしてくれたのだ」<sup>76)</sup>。これは、サーヤナが示唆している解釈でもあるが、この物語は、クリシュナ信仰とのつながりで、興味深い。後のプラーナ聖典では、インドラとクリシュナの対立について語っている。おそらく、クリシュナは、リグ・ヴェーダ期にインドラによって征服された牧畜の神であったものが、バガヴァッド・ギーターの時代になると、失った領土の多くを取り戻して、バガヴァタのヴァースデーヴァや、ヴァイシュナヴァのヴィシュヌとされて、一段と強化されたのであろう。彼を、ジウムナ河の堤で笛を吹く牧夫であれば、絶対者の化身でもある、バガヴァッド・ギーターの著者にさせたのは、このような多方面にわたる起源と歴史に他ならない<sup>77)</sup>。

インドラの傍らには、他の大気現象を表わす、風神ヴァータやヴァーユをはじめ、恐ろしい暴風神マルト神群や、怒号神ルドラなどの弱小神が控えていた。風をめぐる詩人は次のように詠っている。「彼は、どこで生まれ、いつ湧き出したのか。神々の命、世界の胚芽よ。かの神は動き回り、彼が位置するところ、声はすれども、姿は見えず」<sup>78)</sup>。ヴァータは、インド・イランの神である。マルト神群は、インドで実によく見られる猛烈な嵐——「その時、大気は、ほこりや雲によって暗くなり、樹木の茂みは一瞬にして丸裸にされ、その枝はおののき、その幹はポッキリと折れ、あたかも大地は巻き上げられ、山は震え、河は激しく打ちつけられて、泡立ち逆巻くかに思われる」<sup>79)</sup>——が、神格化されたものである。マルト神群は、強烈で破壊的な神々であるが、親切で恵み深い神々になることもある。彼らは世界を果て

から果てまで鞭打ったり、大気を浄化して、雨をもたらしたりする<sup>80)</sup>。彼らはインドラの仲間であり、ディヤウスの息子である。インドラは、マルト神群の長子と呼ばれることもある。彼らは、また、その獐猛な側面から、軍神ルドラの息子であると見なされることもある<sup>81)</sup>。ルドラは、リグ・ヴェーダでは、ごく従属的な位置を占めているだけで、丸ごと讃えられている讃歌としては、三つあるだけである。彼は、両脇に雷霆を抱えて、空から稲妻を放つ。後に彼は、彼をめぐって発達した全伝統と共に、慈悲神シヴァとなる<sup>82)</sup>。

私たちはまた、同様に発達した若干の女神たちにも、出会うことになる。ウーシャスとアディティは、女神である。シンドゥ河は、一つの讃歌で、女神として讃えられており<sup>83)</sup>、河につけられた最初の名称であるサラスヴァティーは、次第に学芸の神になっていく<sup>84)</sup>。ヴァークは、弁舌の女神である。アーラニヤーニは、森の女神である<sup>85)</sup>。後のシャークタ・システムは、リグ・ヴェーダの女神たちを活用することになる。ヴェーダのアーリヤ人は、一切の垢を焼き尽くす神の光をめぐって瞑想しながら、シャクティ、すなわち神のエネルギーに向かって、祈りをささげた。「御身、女神よ、来たりて、我らの願いを叶え給え。御身は、不死の神として、ブラフマンにも匹敵すればなり」<sup>86)</sup>。

思考が、物質的なものから霊的なものへ、物理的なものから人格的なものへと進むと、抽象的な神について考えることが、容易になった。そうした神々のほとんどは、リグ・ヴェーダの最後の巻で現れるところから、その起源が比較的遅いことを、示している。そのような神々のなかに、憤怒神マニウ<sup>87)</sup>や信仰神シュラッター<sup>88)</sup>などがある。神という真の考え方に関連のある若干の特性も、神格化される。サーヴィトリ<sup>89)</sup>と同じだとされることもあるトゥヴァントゥリは、世界の「造り手」もしくは建築家である。彼は、インドラの雷霆を鍛造し、ブラフマナスパティの斧を研ぎ、神々がソーマ酒を飲むときのカップを造り、あらゆる生き物に形を与えた。ブラフマナスパティは、きわめて後期の神で、供犠がはやりだした時期に属している。もと

もとは祈りの神であったものが、じきに供犠の神になったのである。私たちは、彼のうちに、純粋なヴェーダ宗教のスピリットが、後のバラモン教へと移行していく姿を見出すのである<sup>90)</sup>。

## VI

### 一神教的傾向

これからアタルヴァ・ヴェーダをめぐる私たちの議論を通して見ていくように、アーリヤ人的世界の境界を超えた神話的な考え方が、別の思考秩序に属するものとして、ヴェーダのパンテオンに入っていった。こうして神々や女神たちがひしめき合う状況は、知性を退屈させる結果となった。そこで、ごく早い時期に、ある神を別の神と同一視したり、あらゆる神々を一纏めにしたりする傾向が生まれた。この分類の試みから、神々は、大地と、大気と、空の、三つの領域に分けられることになった。こうした神々の数は333もあると言われたり、その組み合わせは3つだと言われたりもする<sup>91)</sup>。神々は、同じ機能を果たしているときは、ペアで呼び出されることもある。また彼らは、ヴィシュヴェー・デーヴァ *Viśve dēvaḥ*、即ちパンテオンという大きな考え方の中に、まとめて容れられることもある。こういう組織化の傾向は、神々や女神たちがひしめき合って、お互いの邪魔ばかりしている無政府状態よりも、そのほうが単純で論理的なところから、おのずと一神教に帰着した。

一神教というのは、神についてのまともな考え方なら、どんなものでも避けられない。至高の存在は、ただ一つであるからだ。至高にして究極の存在を、二つ持つわけにはいかない。ある神は別の神によって創造されたのかという問いが、いたるところで生まれた。創造された神はどんな神も、神ではない。この世の働きや神性への洞察が深まるにつれて、多くの神々は、とかく融合して一つになっていった。天則、リタという観念を通して気付かれる



ところとなった統一という認識が、一神教の支えとして機能した。自然の多様な現象が多くの神々を要求するのなら、自然の統一は、存在するもの一切を抱きとめる単一の神を求めて、当然ではないのか。自然の法則への信頼は、一柱の神への信仰を意味する。

この考え方が進むと、迷信は麻痺状態に陥る。自然のきちんとした組織には、迷信と混乱した思考ばかりが多神教の徴となっているような、奇跡の介入を受け入れる余地はない。私たちはヴァルナ崇拜の中に、一神教への最短距離を見出す。正義、善行、高潔、憐れみといった道徳的ならびに霊的な属性が、彼に帰せられているからだ。より高くより理想主義的な側面がますます強調されていくのに対して、粗雑な側面や物質的側面は、圧迫されたり比較的軽んじられたりするようになっていった。ヴァルナは、人と自然が帰属し、この世と他の一切の世界が帰属する神である。彼は、外面的振る舞いを気遣うだけではなく、内面生活の清らかさにも、気遣いを見せる。一柱の至高の神を秘かに求める宗教意識は、ヴェーダの交替神教 *henotheism* として特徴づけられるものを通して、顕かになった。この言葉を造ったマックス・ミュラーによれば、交替神教というのは、各神々を、まるでその神が最大かつ唯一の神でさえあるかのように、順に崇拜していくものである。しかし、この立場は、そっくり、一つの矛盾した論理を抱えている。心情は正しい前進の道を示しているのに、信念はそれに矛盾しているからだ。私たちが複数の神を持つことが出来ないのは、宗教意識がそれに逆らうからだ。交替神教というのは、一神教に向かう無意識の手探りのようなものである。それでも人間の弱い心は、自らの対象を求めている。インド・アーリヤ人は、究極の存在の神秘と、広く行き渡っている考え方の不十分さを痛感していた。至高者として崇拜される神々は、しばらくは、いずれか一柱だけが最高の地位を占めても、互に横並びの存在であった。一柱の神が、他の神々を否定するわけではない。弱小の神々でも、最高のランクにつくことがあるからだ。それは、一にかかって、詩人の献身的信仰がどれほどで、詩人がどの対象を

特別なものとして目指すのかに、よっている。「ヴァルナは天であり、ヴァルナは大地であり、ヴァルナは大気であり、ヴァルナは宇宙であり、その他一切である」。アグニがあらゆる神々になることもある。時にはインドラが、他の神々より偉大な神となったりもする。どの神も、その間は、あらゆる神々の複合写真のようなものになるものと思われる。宗教体験の中心的事実をなす、神に寄せる人間の全幅の帰依は、ただ一柱の神に対してしか、成り立たないはずだ。だとしたら、単一神教というのは、宗教の論理的帰結のようにも思われるのだから、ブルームフィールドが示唆しているように、「多神教が、恩恵も乏しくなり、決定的魅力にも欠けてきたところから、日和見主義的な一神教に帰着したもので、そこでは、どの神も王権を握るのに、これを保ち続ける者はいない」<sup>92)</sup> というのは、当然なことになる。

各神が創造主と見なされて、この世の造り手ヴィシュヴァカルマンという属性と、生き物たちの主プラジャーパティという属性が付与されると、とりわけ神々のなかには、曖昧で混乱した観念にすぎずに、本格的な人格にも程遠いといった神々がいる場合には、それぞれの人格的な特異性をそぎ落として、共通の機能をもとに一柱の神を造ることが、容易になる。

ヴァルナ崇拜にはっきり見られるような、徐々に理想化されていった神についての考え方や、とかく神々を互いに合流させようとしていた宗教の論理や、一神教の方向に、つまりは、天則リタという考え方や自然の統一といった方向に顔を向けていた単一神教や、人間の心を組織だったものにしようとする衝動などが、みんな一つになって、霊的一神教をもって、多神教的神人同型同性説の代わりとする方向に、働いたのである。この時期のヴェーダの預言者たちは、それ自身は、創造されもしなければ破壊されもしないような、宇宙を創造した単一の原因を発見することに、興味を抱いていた。そのような一神教を確立する唯一つの論理的な道は、神々を一つのより上位の存在のもとに従属させるか、下位の神々を統制できるような支配霊のもとに従属させるか、であった。このプロセスは、一つの神を強く求める気持ちを満たし

てくれる一方、過去とのつながりを保つことも許してくれた。しかしながら、インド的思考は、どんなに大胆で誠実なものであっても、硬直して粗雑なものであったことは、決してない。それは、概して、不人気になることを好まなかったところから、妥協するのが普通であったからだ。無慈悲な論理というのは、また同時に嫉妬深い主人でもあったため、仕返しを受けずにはすまなかったこともあって、今日のヒンドゥイズムは、その順応的スピリットのおかげで、哲学、宗教、神話、魔術から成る異種混成の集団を意味することになったのである。多くの神々は、普遍的スピリットを互いに異なる仕方では現する者と見なされた。彼らは、至高者の宗主権のもと、それぞれ別々の領域で統治を行った。彼らの権力は、あくまでも委任されたものであって、その統治権は、王権ではなく、副王権に属していた。混乱した自然崇拜の気まぐれな神々は、その振る舞いが一つの調和に満ちたシステムを通じて規制を受けるといった、様々な宇宙エネルギーとなった。インドラやヴァルナでさえもが、官僚的な神格となった。リグ・ヴェーダの後期の部分では、最高の位は、ヴィシュヴァカルマンに授けられた<sup>93)</sup>。彼は、あらゆる方向に眼と顔と腕と足を持ち、その腕と翼を使って天と地を産み出し、諸々の世界をことごとく知っているのに、死すべきものたちからの理解は絶しているといった、一切を見通す神であった<sup>94)</sup>。ブリハस्पティも、最高ランクに値すると主張した。それは、多くの場所で、生き物たちの主、ブラジャーパティとされた<sup>95)</sup>。黄金の神、ヒラニヤガルバは、至高者の名前となって出現し、存在する一切の、唯一の「主」と呼ばれた<sup>96)</sup>。

## VII

### 一神教 対 一元論

ヴェーダ讃歌の時代においてさえ、単に荒削りな想像力や空想だけではな

く、熱心な思考や探求もあったことは、疑問に満ちた気分が実にしばしば主張されている事実からも、うかがわれる。多くの神々を要請する必要は、事実をただ与えられるままに受け取るのではなく、物事を理解したいと切に願う、心の衝動に発するものであった。「太陽は、夜は、どこにいるのだろうか」、「星たちは、昼間のうちは、どこにいるのだろうか」、「太陽は、どうして落ちて来ないのだろうか」、「夜と昼では、どちらが先で、どちらが後なのだろうか」、「風はどこから来て、どこに行くのだろうか」<sup>97)</sup>。こうした疑問が、科学と哲学すべての発祥の地を構成する、畏れと驚きに満ちた疑問であり感情であった。私たちはまた、本能的に知識を求める模索が、あらゆる形態と空想を通して明らかになることも、すでに見た。多くの神々が主張されたが、人間の心情に発する憧れは、神々のひしめくパンテオンで満たされることはなかった。どの神が本当の神なのか、という疑問が生じた。「私たちは、どの神に供物を捧げたらよいのだろうか」Kasmai devāya haviṣā vidhema<sup>98)</sup>。神々の慎ましい起源は、きわめて歴然としていたが、新しい神々がインドの土壌で育つと、その中には先住民族から借り受けた神もあった。私たちが信仰深くしてくれる祈りというのは<sup>99)</sup>、信仰心が揺るぎないときには、かえって成り立たない。懐疑論が広まっていた。インドラの実在と優位性までもが、疑問的となった<sup>100)</sup>。ナースティカ、即ち否定的スピリットは、一切合財を、嘘と誤りで固めたものとしてお払い箱にするのに、忙しかった。讃歌は、知られざる神々に向けられた。私たちは「神々の黄昏」に帰着するのだ。そこでは、神々がゆっくりと死に絶えていく。ウパニシャッドでは、黄昏が夜に代わって、正に神々が、過去を夢想する者たちにとっては別として、姿を消していった。一神教期の単一の偉大な存在でさえ、批判をまぬかれなかった。人間の心は、神人同型同棲性説的な神には、満足することはないからだ。もし私たちが、そのもとに他の神々が存在するような、一柱の偉大な神が存在するのだと言っても、問うべき問いが、まだ残っている。「身体を持たない者が身体を持つ者を産んだとき、最初に生まれた者を見たのは、誰なのか。宇宙の

生命や血液や自己は、一体どこにあるのか。誰がこれを知っているのかと、出かけて尋ねたのは、誰なのか<sup>101)</sup>。これは、哲学の根本問題である。生命とは、宇宙の本質とは、いったい何なのか。ただのドグマでは、役に立たない。私たちには、霊的実在を感じたり、体験したりすることが、必要になるのだ。そこで、「最初に生まれた者を見たのは、誰なのか」という問いが、あらためて問われることになる<sup>102)</sup>。探求的な心は、個人的な満足や幸せを気遣うより、むしろ絶対的な真理に関心を寄せた。私たちが神を、野蛮人と共に、傷つけられて怒りに駆られた人間と見ようと、文明人と共に、慈悲と憐れみに満ちた存在と見ようと、全大地の審判者にして、この世の作者にして批判者というのは、批判に耐えることはできない。神人同型同性説的な観念などは、消え去るほかない。それらの観念が与えてくれるのは、神の代理物であって、真の生きた神ではないからだ。私たちが信じなければいけない神は、生命の中心としての神なのであって、人間の心に映し出された神の影などではない。神は、私たちを四方八方から取り巻いている、汲めども尽きせぬ光なのだ。プラーノー・ヴィラーティ Prāno Virāṭ 「生命は、計り知れない」のである。それ、光もしくは生命は、物事ばかりか、思考をも含んでいる。同じことが、様々な様相のもとで顕かになる。神は、一者にして一様、永遠にして必然、無限にして全能の存在であるからだ。そこから、一切が流れだし、そこに、一切が帰入するのだ。人格的な神の情緒的な価値がどんなであろうと、真理は、別の基準を立てて、別の崇拝対象を要求する。真理は、どんなに冷たく、よそよそしいものに見えようと、どんなに畏れ多く、つまらないものに見えようと、真理であることをやめることはない。今日でも大多数の人類がしがみついているような一神教は、後期ヴェーダの思想家を満足させることはできなかった。

彼らは、「存在」サット Sat という中性の用語を中心原理に応用して、それが性別を超えていることを示した。アグニや、インドラや、ヴァルナでさえも、それが採った形態であり名称でしかないような、背後に隠れた者が実

在することを、彼らは確信していた。その者とは、多者ではなく一者であり、「動くものと留まるものの一切、歩く者や翔ぶものの一切、互いに異なる形で生まれたもの一切」を<sup>103)</sup> 治めている、非人格的な存在である。「本当に存在するのは、一者であって、識者はそれを、アグニ、ヤマ、マータリシュヴァンなどと、様々な名前と呼ぶのだ」<sup>104)</sup>。

星の瞬く天，広大な大地，豊かな海，たたなづく丘，これらは，  
 すべて，一つの心が採る異なる働きにして，同じ顔が見せる異なる表情，  
 一つの樹木に咲く異なる花にして，  
 大いなる黙示録を飾る異なる登場人物，  
 永遠を指し示す，異なるタイプにして，異なるシンボル，  
 最初にして最後，真ん中にして果てしなきもの，なり<sup>105)</sup>。

この一者は、この世の魂にして、宇宙に内在する理性であり、全自然の源にして、永遠のエネルギーである。それは、天でも、地でもなく、日の光でも、嵐でもなく、かえてまた別の本質、おそらくは、天則リタが実体化したもので、無垢なる女神アーディティが霊化したもの、呼吸無き一つの氣息なのだ<sup>106)</sup>。私たちは、それを見ることも出来ず、それを十分に説明することも出来ない。詩人は、感動的な誠実さをこめて、次のように結論づけている。「これらの事象を生み出した者の姿を私たちが目にすることは、絶えてないだろう」、「私は、自分の心に住む、ひとりの無知なる愚か者として、神々の隠れた住まいを尋ね求める。——自分では突き止めることが出来なかったので、すでに突き止めているかもしれない賢者たちに尋ねてみる。知ろうとしたところで、分かりはしないのに……」<sup>107)</sup>と。それは、あらゆるもののうちに住み着いて、それらすべてを動かしている、至高の实在であり、薔薇となって顔を赤らめ、雲の美しさとなってさっと吹き出し、嵐となって自らの力を披瀝し、空に星々を据え置く、本当の一者なのだ。だとしたら、ここには、

あらゆる神々のうちの唯一の神である、<sup>まこと</sup>真の神をめぐる直観が——いつの日にも素晴らしい直観だとはいえ、まことのヴィジョンが得られたのは、心の歴史のごくごく早い朝まだきであったところから、とりわけ素晴らしいと言ってよい直観が——働いていたことになる。この一なる実在を前に、アーリア人とドラヴィダ人の、ユダヤ人と異教徒の、ヒンドゥとムスリムの、クリスチャンと異端者の区別は、すべて消え去ってしまう。ここには、すでに、一つの理想をめぐる束の間のヴィジョンが働いているのに、そのヴィジョンに照らせば、今あるのは、地上のあらゆる宗教にとっての完璧な日を指し示す、おぼろな影ばかりである。一者が多くの名前と呼ばれる。「僧侶も詩人も、ただ一なる隠れた実在を、言葉をもって、多くのものに仕立ててしまう」<sup>108)</sup>。人は、この広大無辺な実在をめぐるには、ごく不完全な観念を形成するほかない。人の魂の願いも、「私たちがたまたまこの地で崇敬することになった神像、アイドル」という名の不十分な観念で、十分満足してしまうもののように思われる。しかし、どんな二つのアイドルも、まったく同じではありえないのは、どんな二人の人間も、まったく同じ観念を抱いているわけではないからだ。私たちがそれによって実在を表現しようとするシンボルをめぐる、たがいに喧嘩をするなど、愚の骨頂である。ただ一柱の神が、その働く領域の違いや、神を求める魂の好みの違いなどによって、別様に呼ばれているだけだからだ。しかしこの見解は、人気の高い宗教にとっては、あまり都合のよいものではないなどと、見なしてはならない。これは、一つの深甚な哲学的真理の、啓示であるからだ。イスラエルにも、同じ啓示が下った。「汝の神なる主は、一つである」。プルタルコスも言っている。「あらゆる国家の上に、一つの太陽と一つの空が存在し、多くの名前のもとに、一つの神格が存在する」と。

おお、多くの者が一つの名で呼ぶ、この上もなき栄光に満ちた神よ。  
果てしなき年月を通じて同じき者にとどまる、自然の偉大なる王よ。

御身の公正なる命めいによりて、一切をコントロールしたまえる全能者、  
めでたきゼウスよ。あらゆる国に住まう御身の生き物たちは、  
すべからく、御身に向かって呼びかけるをもって、旨とすべし<sup>109)</sup>。

リグ・ヴェーダのこういう一元論について、ドイッセンは次のように記している。「ヒンドゥの人たちは、他の国々のそれとは本質的に違う方法で、こういう一元論に到達する。エジプトでは、さまざまな地方神を機械的に同一化することで一神教に到達したのであり、パレスチナでは、幾重ものヴェールを透かして統一を眺めるという、より哲学的な道に則って一神教に到達したのではなく、自分たちの国民的な神ヤハウエーのために、他の神々を禁止して、これらを崇拜する者たちを迫害することで、一神教に到達したので<sup>110)</sup>と。マックス・ミュラーは、次のように言っている。「リグ・ヴェーダのサンヒターの集成が終わったのがいつであれ、すでにそれより前に、男性でも女性でもない一なるもの、一者しか、存在しないのだという確信が、形成されていたのである。人格性と人間性のあらゆる状態と限定を遙かに超えてはいるのに、それでもやはり、事実上はインドラ、アグニ、マータリシュヴェンという名前が意味し、いや、生き物たちの主、ブラジャーパティという名前さえもが意味している当の存在しか、存在しないのだという確信が。実際、ヴェーダの詩人たちは、アレクサンドリアのキリスト教哲学者たちのあるものが、今一度到達することになる、とは言え、今でさえ、クリスチャンを名乗る多くの人たちには、手が届かないような、神性をめぐる一つの考え方に、すでに到達していたのである」<sup>111)</sup>。

リグ・ヴェーダの進んだ讃歌の中には、至高者を、無造作に「彼」もしくは「それ」と呼んでいるものもある。西洋哲学の際立った特徴でもあれば、東洋哲学の際立った特徴でもある、一神教と一元論の間をはっきり揺れ動く現象が、思考の歴史では、ここにおいて初めて顕かになったのだ。哲学の、姿も人格も感情も欠いた、同じ純粋な存在が、情緒的人間の、温かい血のみ



なぎるハートによって、優しく恵み深い神格として、崇拝されたのである。これは、避けられないことである。一般に宗教意識は、有限な意志と無限な意志という二つの意志の間の、対話もしくは交感という形をとるからだ。そこには、神をして、有限な人間に対する無限の人格とする傾向がある。けれども、神をして、多くの神々の一つとする、こういう考え方は、哲学の最高の真理ではない。だが、それでも、自分たちの原理を極端な結論にまで推し進めることを願う、僅かな数の過度に論理的な人たちにとっては別として、人格的な神を欠いた宗教というのはありえない。哲学者でも、最高の実在を定義せよと求められても、より低いレベルに還元されるような用語を用いるしかない。人は、自分の有限な力では、「普遍的な靈魂」の超越的な広大さをカバーすることなど、できないことを知っている。それでも人は、自分流のささやかな仕方で、「永遠者」を説明するほかないのである。人は、自分の限界に縛り付けられて、一切万物の、広大かつ崇高で、いわく言い難い源とエネルギーを、やむなく、不十分な絵の中に押し込めるしかない。人は、自分の満足のために、神像もしくは偶像をつくり上げてしまうのだ。人格というの是一個の限定ではあるが、それでも、人格的な神しか、崇拝対象とはなりえない。人格性は、自己と非自己の区別を含蓄しているところから、存在する一切を含んで、これをみずから抱きとめるといった「存在者」には、適用できないからだ。人格的な神というのは、<sup>まこと</sup>真の生きた神の最高のシンボルではあっても、やはり一つのシンボルである。形のないものに形が与えられ、非人格的なものが人格的なものとされるのであり、至る所に存在するものが、局所的住まいに固定され、永遠なるものに時間的しつらえが与えられるのだ。絶対者が崇拝対象に還元された途端、それは絶対より以下のものになってしまう。「神」は、有限な意志との実際的な関係を持つためには、「絶対者」より以下のものでなくてはならないが、「神」が「絶対者」より以下のものであれば、「神」は、どんなに有力な宗教においても、崇拝対象とはなりえない。「神」が完べきな存在であれば、宗教は成り立たず、「神」が

不完全な存在であれば、宗教は有力なものとはなりえない。私たちは、有限な「神」を相手にしたのでは、平安に満ちた喜びをも、勝利の確信をも、宇宙の究極の運命への信頼をも、抱くことはできない。真の宗教は「絶対者」を要求する。そこで、人気の高い宗教と人気の高い哲学の双方の要求に応えるために、「絶対的靈魂」が、無差別的に、「彼」とよぼれたり、「それ」と呼ばれたりすることになる。事情は、『ウパニシャッド』においても、『バガヴァッド・ギーター』においても、さらには『ヴェーダーンタ・スートラ』においても、皆同じである。私たちはこれを、有神論的要素と一元論的要素の意識的な妥協にまで抑え込んだり、何か言い逃れの思考にまで抑え込んだりする必要はない。何故なら、一元論的な考え方でも、最高の宗教的スピリットを育てることが、出来るからだ。「神」への祈りを、この世を支配する「至高の靈魂」をめぐる黙想に、切り替えるだけでよい。この世に、的確ではあっても、惜しみのない仕方で感動を与えてくれる、愛をめぐる黙想に、切り替えるだけで。ひとの部分的な心と「絶対者」の全体的な心同士の共感が、最高の宗教的感情を産み出してくれるからだ。「神」に対するこのような理想的な愛と、充滿する美と善をめぐる瞑想が、心を宇宙的感情で満たしてくれる。たしかに、そのような宗教は、まだそこに到達して、その力をありありと感じていない人たちには、あまりにも冷たく、あまりにも知的であるように思われたとしても、哲学的にも正当だと認められる宗教は、他にはあり得ない。

これまで地上に現われた宗教の形態は、どんなものも、人間の心情に発する根本的欲求に応えるものであった。ひとは、頼りにすることが出来るような、自分を超えた力に、つまりは、自分より偉大であるため、みずから崇拜することが出来るような「絶対的存在、一者」に、憧れる。ヴェーダの宗教のいくつかの段階の神々は、人間の、成長しつつある欲求や欲望をはじめ、手探りを重ねる心や、探求を続ける心情などの、反映である。人は、自分の祈りを聞いて、捧げものを受け入れてくれる神々がいてくれたらと、切に願

うこともあるが、私たちは、この処方箋に応えてくれるような神々を、すでに持っている。つまりは、自然主義的な神々や、神人同型同性説的な神々が、それである。だが、それらの神々は、唯一の「至高者」が採る多様な表現なのだと言うことで、それらの神々を、人間の心に向かってどんなに正当化しようと、その、どの一つも、最高の考え方には応えてくれなかったのである。そこで、ひしめく神々の間に散乱していた光線が、人間の心情の休むことを知らない渴望と懐疑心をやっとなたしてくれるような、名前を欠いた「唯一の神」というとてつもない栄光に、集約されることになる。『ヴェーダ』の前進は、この究極の實在に帰着するまでは、止まることはなかった。讃歌を通して具体的に認められる宗教的思考の成長は、典型的な神々に言及することで、その跡を辿ることが出来る。(1)ディヤウス、自然崇拜の最初の状態を示している。(2)ヴァルナ、その後の高度に道徳的な神。(3)インドラ、征服と支配の時代の、自分本位の神。(4)プラジャーパティ、一神教徒の神。(5)ブラフマン、これら四つの低位の神々すべての、極致。この進み行きは、論理の展開にも、時代の順にも、当てはまる。ただし、ヴェーダの讃歌では、これらの神々が、論理的な配列や時代の順序など少しも考えずに、無造作に並列されている。同じ一つの讃歌が、これらの神々すべてを指し示していることもある。ただそれは、リグ・ヴェーダのテキストが書きおろされた時には、こうした思考の段階が、すっかり辿られた後のことで、人々は、その矛盾には少しも気付かずに、これらの神々に、一部もしくは全面的に執着していたことを、示しているのだ。

## 第一部第二章 つづく

(やまぐち・やすじ 元文学部教授)